日本篆刻家協会会報

第7号　平成23年9月30日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX072-760-3853
E-mail : info@n-tenkoku.jp

第二七回 日本篆刻展開催

第二七回となる、唯一の全国規模の篆刻公募展「日本篆刻展」が、五月十七日から二十二日まで大阪天王寺公園内の大阪市立美術館地下展覧会室で開催された。特別展観「唐代の書と文物」は壁面、ガラスケースに分けて多数陳列された。海外交流はほぼ一巡した中国本土から出て、初めて台湾印社の三十八人が交流出展した。

会場を訪れ西泠印社理事祝遂之氏と挨拶を交わす周澄団長ら台湾印社訪日団メンバー

壁面とガラスケースの特別展観「唐代の書と文物」

役員の作品

参与・常任委員らの作品

委員・会員の作品

審査

第二七回日本篆刻展の審査会が四月二日大阪市立中央会館で行われた。理事以上の役員を除く一〇六四点を対象に厳正公平な審査により協会賞三点、大賞一点、準大賞一〇点、優秀賞一八点、奨励賞八二点、特選五三点、秀作一二七点、会員推薦賞九四点が選ばれた。

慎重に行われる審査

主な受賞者

梅舒適賞（評議員）

吉江翠光　大田桂翠　小上玉菡

日本篆刻展大賞（常任委員）

古野燕安

日本篆刻展準大賞（常任委員）

荒崎浄仙　坂上香艸　白尾芳雲
河野碧龍　天野心淵　岸村爽風
滑田寒鴉　松本清苑　北田成磊
仲森蓬園

日本篆刻展優秀賞（常任委員）

大槻直佑　森川恵扇　杉本素月
鈴木紀山　会田慶子　佐藤正明
西谷亀石　南敏子　伊藤淨盦
千蔵天空　手塚粹香　樋口桃園
福本青桐　静一華　田中皋仙
甲斐田晴虹　田中登志子　池田蘆翠

授賞式

会期中の五月二十二日の日曜日ホテル大阪ベイタワーで開催され全国から三二六人が参加した。各賞ごとに受賞者が紹介され、それぞれまたは代表者に手渡された。

開会あいさつする山下理事長（中央）

受賞者代表に賞状を手渡す平田副理事長(左端)

出品者懇親会

引き続き出品者懇親会が開催されみんなで受賞者を祝福した。来賓紹介、祝辞、新役員昇格者紹介が行われた。

梅舒適賞を受ける（右から吉江、大田、小上各評議員）

謝辞を述べる古野常任委員

出品者懇親会に全国から多数参加

梅舒適賞の選考にあたって

大賞選考委員長　山下方亭

評議員はキャリア十年以上研鑽して、作家としての意欲に満ちている。作品寸法は全紙四分の一サイズであるが紙面をいかに纏め上げるかがポイントであろう。そのために篆書や絵画や墨彩などで埋める等、皆さんが様々な努力をして表現している。そんな作品の審査にあたっては真摯に向き合い慎重をきした。まず企画委員から全体の作品を選んで推薦し推薦理由を述べてもらい、私が決定するところとなった。

推薦の候補作に挙げられた作品の審査所感を述べると山田青渓、書作にたよったが印より書き入れが過ぎ調和していないのが残念。田原呉山、大作二点は迫力があったが側款の内容を上げて欲しい。木村容庸、印文の如くいま一歩足りなかった。いずれも惜しまれるが再度挑戦をして欲しい。その結果、次の三氏に決定した。

大田桂翠　四印それぞれの作風を変えた作品はレベルが高く、側款と共に調和している。

小上玉菡、構成よく切れ味と雅味を備えた印と釈文の書き入れが調和している。

吉江翠光　一印ながら浙派調の大作はよく纏めた。

全体を見渡しての印象は紙面を埋めるための具象的な書作や絵画は作品効果を上げているとは思えず墨象や絵画で、却って篆刻の足を引っ張る結果となっている。行書や篆書書作や側款による見せ方が求められる。シンプルイズベスト！

※三氏共、印社を持ち後進の指導をしているので、今後は協会の業務と共に頑張って欲しい。

第三回日本篆刻家協会役員展

去る三月十一日の東日本大震災により会場の古河市篆刻美術館も被災したため一時休館となり、今年の協会役員展開催は危ぶまれたが、古河市の理解と尽力により迅速に復旧が進み、六月二十五日から八月二十五日まで予定どおり開催された。

六月二十五日同美術館において今年で三回目となるこの展覧会の開幕式が行われた。大村高陵先生主宰の「越思篆会創立三〇周年・富山市民大学篆刻同好会二五周年記念展」の開幕と重なったため、両展覧会の開幕式の役員出席が調整され、本役員展には井谷五雲、眞鍋井蛙副理事長、酒居石荘、小朴圃代表理事ほか役員と地元会員が出席した。式は午後二時から展示室二階において協会役員並びに古河市関係者ほか多くの会員が参集するなか、市川常務理事の進行により開式された。はじめに主催者として地元古河市の遠藤教育長、本協会井谷副理事長が挨拶し、続いて幹部役員や出席の役員、古河市教育委員会、美術館関係者が紹介された。昨年に引き続き今年も協会幹部役員の作品が古河市に寄贈され、目録が井谷副理事長から遠藤教育長に贈呈された。次いで本協会から篆刻美術館への震災見舞金の贈呈も行われた。

今年も、梅先生の遺作（特別展観）をはじめ理事長以下役員六十七人の作品が展示された。作品の印影はもとより、作者の個性が表現された墨書にも食い入るような眼差しで鑑賞されている方も多くみられ、特に印象に残った。

作品鑑賞の後、会場を移動、午後三時から市内ホテルにて「記念研究会」が開催された。事務局で準備した座席も満席となる百余人が参加した。記念講演は、井谷五雲副理事長が「蘇州芸苑―明代の書」と題してスライドを使い「明代の書道」を中心に分かりやすい解説をし、書を志す者には大いに参考になったと思われた。第二部の作品指導会では、三人の講師（眞鍋副理事長、酒居代表理事、小代表理事）から印稿や印影等の添削指導を受けた。講師を囲む大きな人だかりができ予定の時間をオーバーする盛況の中に、指導を受けた会員の笑顔が目立っていた。

引き続きの「記念懇親会」では、幹部と会員との交流を図るため、今年も幹部役員が分かれて各テーブルへ着席し、打ち解けた会話も盛り上がり、各卓とも有意義な時間を過ごすことができた。酒居代表理事の閉会の挨拶で、来年の再会を祈念してお開きとなった。

（杏壇篆会　青木雄山）

蔵を美術館にしている篆刻美術館

美術館への災害見舞金を贈呈

開幕式に参加の会員等

開幕挨拶する古河市の遠藤教育長

スライドを交えて講演する井谷副理事長

作品指導に当たる講師を囲む（上から真鍋・小・酒居各講師）

真鍋副理事長（中央後ろ向き）の講演に聞き入る参加者

全国から参集の機に「印社代表者会議」

蘭台関連参考品を鑑賞

第四回中央研究会

平成二十三年八月二十日～二十二日の日程で、第四回中央研究会が舞子ビラ神戸で行われ、全国から一七二人の本協会会員が参加した。

初日、受付終了後、山下方亭理事長による開会挨拶、分刻課題である「日本千字文」の説明及び分刻割り当てが行われた。「日本千字文」は篆刻を学ぶ者にもあまり知られてはおらず、配付された復刻資料を用いて解説いただいたことは意義深いことであった。引き続いて長谷川帰海常務理事から、一月に逝去された本協会顧問邊見彷厓先生の遺作集が紹介された。邊見先生の作品のすばらしさに改めて感じ入ると共に、心温かくも時には厳しく私たちをご指導下さった邊見先生の在りし日を偲ぶよすがとして大切にしたい。続いて、真鍋井蛙副理事長による講演が「初世・二世中村蘭台とその周辺　～菅野梁川の自用印を中心として～」と題して行われた。会場には刻字作品の額や印材印影等が陳列されており、初世・二世蘭台と石川蘭八、松浦羊言についてスライドを用いて詳しく解説された。また、中島春緑代表理事が二世蘭台に自用印を依頼されたときのエピソードを話され、南岳杲雲常務理事が印人達の楽しい噂話等披露されたりと、益々蘭台を初めとする印人が身近に感じられ、一層理解も深まったようである。

夕食後、伊佐治祥雲、石原豊玉、黄平齋の三人の先生方による分刻作品製作指導があり、普段はあまり接する機会

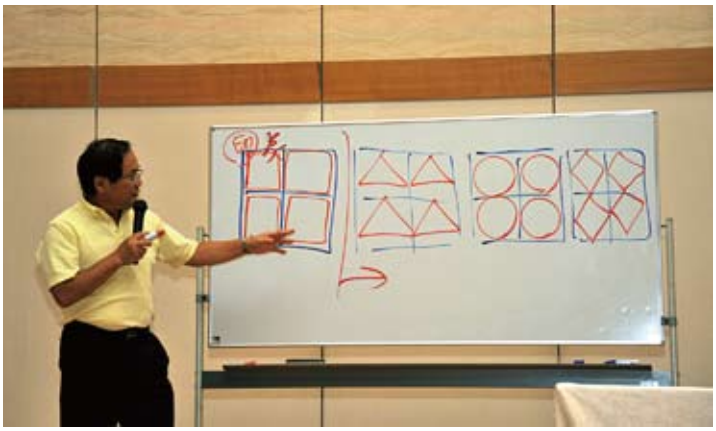
分刻作品制作指導風景

のない先生方に熱心に指導を乞う会員の姿が見られた。

二日目、午前中は昨夜に引き続き分刻作品製作指導が組まれ、この日は伊藤雅夫、喜多芳邑、南岳杲雲、長谷川帰海、古溝幽畦の五人が担当した。加えて、印社代表者会議を終えた先生方も顔を出し製作に励む会員に声をかけ、指導助言した。参加した会員の数も多く、的確なアドバイスを受けながら分刻課題の製作が進んでいた。午後には、関西大学名誉教授山岡泰造先生による「近代中国絵画について」の講演があり、清朝末期から現代に至る中国史の概略を辿りながら、任伯年、徐悲鴻、傅抱石、陸儼少、黄胄、朱屺瞻の紹介をした。先生が持参された十本の軸も展観され、画家たちの師弟関係と交友、時代背景と作家作品の関わりなど興味深くお話をうかがうことができた。夜は恒例の懇親夕食会が開かれ、舞台で紹介される公募展の入賞者や協会の新役員に拍手を送り、和やかに親睦を深めた。

近代中国絵画を鑑賞

講演する山岡先生


講評・講義する井谷副理事長

三日目、製作した分刻課題を提出し、井谷五雲副理事長による講評・講義が行われた。金文を用いた印を製作する上での要点をわかりやすくまとめたもので、今後の作品製作にはとても役立つ内容であった。まだまだうかがいたいことはたくさんあり、名残りは尽きなかったが、午前十一時に閉会した。

平成二四年度の中央研究会は八月十八日（土）～二十日（月）の二泊三日、これまで通り舞子ビラ神戸を会場として開催することが決定された。来年も多くの会員の皆さんが参加されることを願っている。

（研究部　中林千影）

中央研究会を終えての所感

理事長　山下方亭

年一回の協会主催の行事である中央研究会も四年。延べ人数にすれば、六百人位の参加があったと思う。しかしこの人数の内、四回参加の人を除くと新人はかなり減るだろう。

篆社の時代からは随分と人の移り変わりを感じるのだが、それは十年、二十年を経過しての思いであって年々歳々人同じからずといきたいのだが、近年は参加メンバーが固定してしまっているようにも思えてならない。一方で知らない人も多くなったなぁと感じるのが矛盾するところである。身内の隨風會にしても二十一人中初参加は一人である。一度参加すれば二度、三度とあるのだが最初の一歩が踏み出せないのであろう。

主催する側としては様々趣向を凝らしている。協会会員皆様に、直接篆刻の実作指導や篆刻に関する教養を企画しており、未経験の方には是非お勧めしたい。篆刻にどっぷりと浸かる三日間を過してみればいかがであろう。

今回は参加者からアンケートをとっているので来年の研究会には反映されるだろう。

―分刻は日本千字文―

本年の分刻を日本千字文としたが、本年は役員全員に参加を求め、中央研究会参加者を加える方式とした。日本千字文は初めてであり、初の分刻印譜の刊行に期待して欲しい。

一月課題「吉祥止止」

役員（平田蘭石 選）

桂舟

九郎

祥雲

踏青

杏葉

常任委員（伊佐治祥雲 選）

静雲

紀翠

鏡水

征

芝蘭

委員（石原豊玉 選）

康風

緑

正明

白峰

墨石

会員（市川両僊 選）

忠

隆一郎

桂華

法禅

外茂一

一般（伊藤雅夫 選）

碧翠

勝山

桃苑

智子

香代子

【役　員】上松荘夢
○岡田桂舟　中野桂鵬
○今西九郎　名倉克彦
○重原祥雲　村田祥鳳
○関踏青　桃睦苑
○正和杏葉　浅良朱華
渡部芳月　浅野祥雲
高嶋満喜　畠穆風
計四一人

【常任委員】田中九成
○上田静雲　松本弘碩
○瀧上紀翠　舘智舟
○吉田鏡水　田中壽江
田中龍神　寄田龍神
○小谷征　南敏子
○亀井芝蘭　水上健治
丸山蘇碩　橋本碧峰
花房浩佳
計八四人

【委　員】竹内霍山
○津堅康風　水上一雄
○山吹緑　矢田高秋
○八木正明　服部和代
○管白峰　松野碧泉
○長谷山墨石　井本究石
武友早知子　松永平峰
桑島龍三
計九六人

【会　員】木村行石
○五十嵐忠　倉永柳葉
○川端隆一郎　小林邦夫
○高杉桂華　鈴木宏慥
○平川法禅　土屋功勝
○宮崎外茂一　堂守唯文
石橋美名子　森静二
大井智枝　吉三友
計一〇四人

【一　般】浦岡香
○國江碧翠　神原彌太彦
○大野勝山　三井顔了
○須田桃苑　松本一
○板屋智子　宮坂菰田
○山田香代子　吉田豊
長谷部石舟　石場渓州
広森勝竹　石崎公朗
計一八人

二月課題「以此自娯」

役員（真鍋井蛙 選）

立女

正歩

踏青

祥鳳

輝代

常任委員（大原邦舟 選）

静雲

智舟

龍神

征

浄仙

委員（喜多芳邑 選）

平峰

笙鶴

容史子

早知子

敏之

会員（黄平齋 選）

極浦

小綽

法禅

康生

惠笙

一般（榊原晴夫 選）

勝竹

公朗

勝山

公一

忠男

【役　員】今西九郎
○竹内立女　桃睦苑
○坂正歩　田原呉山
○関踏青　上松荘夢
○村田祥鳳　山崎一雄
○南輝代　浅野祥雲
畠穆風　高野弘深
名倉克彦　花村秀嶽
計三八人

【常任委員】岡上汀華
○上田静雲　奥島艸丘
○舘智舟　田中九成
○寄田龍神　瀧七郎
○小谷征　杉山練山
○荒崎浄仙　西谷亀石
古野燕安　多田学友
橋本碧峰　伊藤桃山
計八六人

【委　員】高橋忠義
○松永平峰　安井芳泉
○廣田笙鶴　松野碧泉
○大城容史子　山下登雲
○武友早知子　矢田高秋
○小谷敏之　茶本仙華
青木雄山　益邑隆
浅野道男　鈴木玉峰
計九九人

【会　員】松原淺峰
○奥島極浦　小平隆志
○古在小綽　森本翠汀
○平川法禅　吉岡龍生
○月森康生　近藤芙美子
○中尾惠笙　中村紀久
横関良清　荒木彬陽
前田舫崖　土屋功勝
計九七人

【一　般】板屋智子
○広森勝竹　安喰冬雲
○石崎公朗　須田桃苑
○大野勝山　北出史郎
○飯田公一　石場渓州
○木村忠男　牛島鈴輪
國江碧翠　三井顔了
長谷部石舟　神原彌太彦
計一七人

三月課題「無我」

役員（大村高稜 選）

杏葉

立女

常任委員（佐川大羊 選）

敏子

翠苑

委員（南岳杲雲 選）

縁

桃華

会員（長谷川帰海 選）

華紅

外茂一

一般（古溝幽畦 選）

顔了

史郎

克彦

慶石

究石

憲石

公一

惠苑

艸丘

笙鶴

唯文

鈴輪

祥雲

无髯

蒼洋

扇舟

初代

【役員】堀口秀雄
○正和杏葉　関踏青
○竹内立女　高野弘深
○名倉克彦　高嶋満喜
○原田恵苑　林旦山
○重原祥雲　畠穆風
今村董圃　坂正歩
山崎一雄　渡部芳月
計四〇人

【常任委員】大橋実秋
○南敏子　大槻直佑
○池田翠苑　瀧上紀翠
○葭岡慶石　亀井芝蘭
○奥島艸丘　上田静雲
○國井无髯　永野草翠
青黄游魚　各務紅泉
宇都宮蘭雪　花房浩佳
計八九人

【委員】松永平峰
○山吹緑　長谷山墨石
○中野桃華　今井朴仙
○井本究石　武友早知子
○廣田笙鶴　杉江周作
○小堀蒼洋　三原大
高橋忠義　飯田通敬
新井碧峰　山下登雲
計一〇七人

【会員】中島敬次
○福谷華紅　磯村育治
○宮崎外茂一　中井榮子
○小川憲石　立石雄二
○堂守唯文　森井昌雲
○和田扇舟　月森康生
山村千秋　森川雨琴
仲里隆峰　平川法禅
計一〇三人

【一般】吉田豊
○三井顔了　石場渓州
○北出史郎　川上嫩碧
○飯田公一　松本一
○牛島鈴輪　北岡弘子
○乙木初代　木谷浩三
辻本邦子　浦岡香
石崎公朗　笹倉柳石
計二九人

四月課題「静者安」

役員（酒居石荘 選）

踏青

立女

常任委員（御手洗眉山 選）

沙舟

敏子

委員（保田昌石 選）

道男

平峰

会員（渡邊和琴 選）

和雄

龍生

一般（伊佐治祥雲 選）

顔了

浩三

【役員】畠穆風
○関踏青　正和杏葉
○竹内立女　松田泰軒
○坂正歩　田原呉山
○南輝代　加藤静雲
○今西九邨　木村容庸
岡田桂舟　浅野祥雲
畑間青露　渡部芳月
計四二人

【常任委員】樋口桃園
○丸山沙舟　河瀬魚仙
○南敏子　小谷征
○濱口韶曄　青黄游魚
○手塚粹香　大槻直佑
○永井箕山　湯浅翠嶺
渡邊尚石　西谷亀石
岡上汀華　花房浩佳
計七九人

【委員】平松清嗣
○浅野道男　井本究石
○松永平峰　武友早知子
○柴久利江　高橋忠義
○谷川松雲　笹倉柳石
○野田邦子　川野朱苑
長谷山墨石　山内真波
熊木信男　川久保明
計九七人

【会員】土屋功勝
○舟山和雄　伊井啓
○吉岡龍生　高橋裕進
○清水信昭　鈴木祐輔
○福谷華紅　杉木和子
○横関良清　北畑謙之
奥島極浦　田辺碧水
森井昌雲　中井榮子
計一〇五人

【一般】神原彌太彦
○三井顔了　相川良孝
○木谷浩三　石場渓州
○大野勝山　吉田豊
○北岡弘子　長谷部石舟
○嘉月　飯田公一
石崎公朗　上野鶴羽
川上嫩碧　松本一
計二四人

正歩

韶曄

久利江

信昭

勝山

輝代

粹香

松雲

華紅

弘子

九邨

箕山

邦子

良清

嘉月

五月課題「惜寸陰」

役員（小朴圃 選）

踏青

容庸

常任委員（石原豊玉 選）

直佑

瑞邦

委員（市川両僊 選）

嘉信

康風

会員（伊藤雅夫 選）

静二

笙山

一般（喜多芳邑 選）

勝山

碧翠

【役員】正和杏葉　岡田桂舟　畠穆風　浅良朱華　藤田孝風

【常任委員】吉田鏡水　上野鶴羽　寄田龍神　橋本碧峰　西谷亀石　杉山錬二　前田正陽　杉山美華

【委員】川久保明　中西一系　中野桃華　平松清嗣　藤崎澄子　藤本蘇西　宮越素翠　浅野道男　宮野宗雄

【会員】原田泰久　森川雨琴　土屋功勝　永井守　小平隆志　大井智枝　堂守唯文　森井昌雲

【一般】宮坂菰田　石場渓州　相良はる子　相川良孝　川上嫩碧　神原彌太彦　板屋智子　木谷浩三

○関踏青　○木村容庸　○桃睦苑　○竹内立女　○浅野祥雲　上松荘夢　名倉克彦

○大槻直佑　○宮本瑞邦　○水野和香　○井本敏子　○小谷征　丸山沙舟　各務紅泉

○伊藤嘉信　○津堅康風　○鈴木玉峰　○水上一雄　○西口叢映　青木雄山　浅野道男

○森静二　○木村笙山　○舟山和雄　○長沼梅風　○内藤華泉　平川法禅　中尾恵笙

○大野勝山　○國江碧翠　○清水正男　○小野太秀華　○石崎公朗　松本一　長谷部石舟

計四〇人　計七三人　計一〇一人　計一〇〇人　計一九人

睦苑

和香

玉峰

和雄

正男

立女

敏子

一雄

梅風

秀華

祥雲

征

叢映

華泉

公朗

六月課題「言不盡意」

役員（中島春緑 選）

孝風

踏青

祥鳳

桂舟

董圃

常任委員（黄平齋 選）

静雲

拓石

尚石

芝蘭

游魚

委員（榊原晴夫 選）

墨石

信男

照影

桂水

明

会員（佐川大羊 選）

外茂一

行石

華紅

瑞碩

倫子

一般（南岳杲雲 選）

龍泉

矢岳

香

貴子

勝山

【役員】浅野祥雲　坂正歩　得永春水　竹内立女　稲葉竹葉　堀口秀雄　丸田拓川　山崎一雄　林旦山

【常任委員】宇都宮蘭雪　西谷亀石　小澤博石　田中壽江　寄田龍神　丸山沙舟　小谷征　奥島艸丘　岡上汀華

【委員】安西幸恵　八木正明　柴久利江　石川羊碩　中石象堂　永田乾石　内匠俊夫　浅野道男　稲葉桂峰

【会員】小林英昭　堂守唯文　高橋博　向畑芳翠　吉岡龍生　渡曾俊正　西岡貴美子　荒井典恵　内藤華泉

【一般】青木雄山　森清光　板屋智子　木谷浩三　三井顔了　広森勝竹　牛島鈴輪　相川良孝　石崎公朗

○藤田孝風　○関踏青　○村田祥鳳　○岡田桂舟　○今村董圃　古瀬章石

○長谷川拓石　○渡邊岡石　○亀井芝蘭　○青黄游魚　稲垣竹扇

○長谷山墨石　○熊木信男　○滝口照影　○市川桂水　○川久保明　鈴木玉峰

○宮崎外茂一　○木村行石　○福谷華紅　○小嶋瑞碩　○松本倫子　森静二

○三枝龍泉　○松本矢岳　○浦岡香　○神戸貴子　○大野勝山　國江碧翠

計三八人　計七五人　計八六人　計一〇一人　計二八人

七月課題「和為貴」

役員（山下方亭 選）

羊越

祥雲

常任委員（長谷川帰海 選）

汀華

静雲

祥雲

委員（古溝幽畦 選）

春峰

早知子

墨石

龍神

祥雲

満喜

智舟

清嗣

春泠

游魚

弘深

会員（御手洗眉山 選）

彌太彦

典恵

凌峰

翠汀

隆峰

一般（保田昌石 選）

碧翠

智子

香

鈴輪

公一

【役　員】　桃睦苑　藤田孝風　南輝代　関踏青　木村容庸　村田祥鳳　古瀬章石　坂正歩

【常任委員】　亀井芝蘭　立石見聲　宇都宮蘭雪　井本敏子　瀧上紀翠　松本弘碩　番定静山　田中九成

【委　員】　梅林香堂　内匠俊夫　管白峰　宮野宗雄　井本究石　浅野道男　松永平峰　安井芳泉

【会　員】　川端隆一郎　内田哲舟　藤本忠義　加藤辰二　森静二　永井守　山崎隆平　高橋博

【一　般】　木谷浩三　北岡弘子　大野勝山　小野木秀華　南條史保美　長谷部石舟　北出史郎　吉田豊

【役　員】　重原祥雲　浅野祥雲　高嶋満喜　高野弘深　岡田桂舟　増田繁治　関野青　青黄游魚　城下江曄　長谷川拓石　田中九成　八木正明　森川雨琴　嘉月

【常任委員】　上田静雲　寄田龍神　舘智舟　平松清嗣　岡田郁夫　浅野道男　松本弘碩　番定静山　田中九成

【委　員】　武友早知子　長谷山墨石　平松清嗣　奥島春泠　松永平峰　安井芳泉　八木正明

【会　員】　荒井典恵　松原凌峰　森本翠汀　仲里隆峰　滋野草翠　山崎隆平　高橋博

【一　般】　板屋智子　浦岡香　牛島鈴輪　飯田公一　須田桃苑　吉田豊

計三四人　計七四人　計九四人　計一〇八人　計二一人

八月課題「眉寿」

役員（井谷五雲 選）

純司

祥雲

常任委員（渡邊和琴 選）

沙舟

壽江

踏青

祥鳳

委員（伊佐治祥雲 選）

春泠

照楓

青桐

究石

平峰

拓石

素月

桂舟

会員（石原豊玉 選）

博則

昌雲

剛

凌峰

貴美子

一般（市川両僊 選）

智子

忠男

勝山

顔了

香

【役　員】　渋谷春好　畑間青露　関野羊越　坂正歩　藤田孝風　増田繁治　今西九郎　名倉克彦

【常任委員】　水野和香　白尾芳雲　西谷亀石　舘智舟　甲斐田晴虹　大槻直佑　杉山美華　城下江曄

【委　員】　長谷山墨石　西口叢映　中西一系　加藤臥牛　滝口照影　川久保明　岡田郁夫　山下登雲

【会　員】　中島敬次　兼子悦治　堂守唯文　森静二　森俊吾　長沼梅風　舟山竹峰　中井榮子

【一　般】　國江碧翠　伊神千博　辻本邦子　川上嫩碧　宮坂菰田　清水正男　大野木秀華　広森勝竹

【役　員】　土井純司　丸山沙舟　田中壽江　福本青桐　長谷川拓石　杉本素月　國井无髯　井本究石　松永平峰　大泉香華　川端春峰　木村忠男　大野勝山　三井顔了　浦岡香　長谷部石舟　須田桃苑

【常任委員】　浅野祥雲　関踏青　村田祥鳳　岡田桂舟　大橋安泰　上松荘夢　杉原照楓　大槻直佑　上田静雲　奥島春泠　松永平峰　森俊吾　伊藤博則　森井昌雲　小貫剛　西岡貴美子　長崎智夫　大野勝山　浦岡香

計三七人　計七六人　計八五人　計一〇四人　計一八人

海外交流部から

第二七回日本篆刻展の海外交流先を台湾印社としたことから期間中に同社代表を招いた。同社から周澄社長を団長とする訪日代表団六人が大阪を訪れた。

秋には台湾・台北市で交流展が予定されており、これに合わせて十月二十一日～二十五日、協会訪台団七十余人が派遣される。

日本篆刻展授賞式に参加の訪日団

授賞式で祝辞を述べる周澄社長

懇親会で挨拶する薛平南副社長

台湾印社訪日団は、五月十九日関西国際空港に到着、二十三日同空港発まで協会が受け入れた。一行は日本篆刻展会場視察をはじめ授賞式、出品者懇親会等協会行事に出席するとともに、協会員の案内で京都、奈良を訪れた。また、台北駐大阪経済文化弁事所を表敬訪問したところ、弁事所のホームページ中華民国外務省在外公館ニュース（後掲）に掲載された。

訪日団メンバー

周澄　台湾印社社長
　故宮博物院蔵品徴集委員
薛平南　台湾印社副社長
　世新大学副教授
陳宏勉　台湾印社秘書長
　梅嶺美術会理事長
黄嘗銘　書法篆刻家
蔡雄祥　国立清華大学、玄奘大学教師
蔡耀慶　国立歴史博物館研究員

中華民国外務省在外公館ニュース
台北駐大阪経済文化辦事処黄処長が台湾印社訪日代表団と会見

（六月二日掲載）

社長一行六名と会見、同印社の対日文化交流推進に対する貢献を称えた。

台湾印社代表団一行は日本篆刻家協会の招請により、去る五月十七日～二十二日に大阪市立美術館で行われた第二七回日本篆刻展に参加するため訪日した。周社長は「台湾印社は我国を代表する篆刻団体で会員は専業の篆刻家である。また、日本篆刻家協会は日本で最大の会員数を誇る篆刻団体である。今回が初の対日篆刻芸術交流であり大変重大な意義がある。」と述べた。台湾印社では三十五人の会員の作品を出展し、幹部六人が展覧会に参加した。会期中九〇〇人以上の観衆が訪れ台湾印社の作品も好評を博した。

日本篆刻家協会の山下方亭理事長は五月二十二日に行われた授賞式で「東日本大震災発生後、台湾全国の人々から寄せられた多大なる義援金と支援に大きな感動を覚えた。中華民国建国百年にあたる本年、初めて台湾との交流を行えるということは日台両国関係がさらに密接なものになることを象徴している」とあいさつをした。

周社長は黄処長に対し、台北駐大阪経済文化辦事処が展覧会の後援機関となり、授賞式と懇親会にも出席するなど交流展の順調な進行に全力で協力をしたことに対し感謝の意を表した。同時に日本篆刻家協会の今年十月の訪台と台北での交流展開催に対し引き続き協力をするよう要請した。

協会員の案内で奈良を訪問（東大寺大仏殿前）

東日本大震災への対応

被災地域会員の会費免除と義援金募集

三月十一日に発生した東日本大震災に対し、本協会では阪神・淡路大震災に倣い、被災地域の会員の本年度会費を免除することを直ちに決定し実施された。

一方、会員有志からの義援金と日本篆刻展会場に設けた募金箱に寄せられた計一三一万九七〇九円を読売光と愛の事業団に寄託し被災地に贈った。

2011年8月5日/読売新聞

日本篆刻家協会 131万円を寄託

光と愛の事業団に

日本篆刻家協会（池田市石橋2、会員1500人）は4日、東日本大震災の義援金として131万9709円を読売光と愛の事業団に寄託した。

会員が寄せた浄財に、5月、大阪市立美術館で開いた日本篆刻展会場で集まった募金を加えた。山下方亭理事長は「被災地の1日も早い復興に役立てていただきたい」と話している。

近藤梯獅　河野碧龍　岩井映舟　市浦達生
浅野散閑　浅野道男　上野鶴羽　小林英昭
谷内弘照　道家薫染　永井守　金内ヨウ子
山本祥縁　重原祥雲　太田恵水　堤浮生
月森康生　生嶋晨空　舘智舟　高杉桂華
大塚義春　酒向誼桂　師子堂房翠　服部治子
音川景香　吉田申隆　森井翠鳳　千葉至聲
山村ひろみ　楢崎稔　倉野看雨　伊佐治祥雲
竹内立女　加藤清城　大西勝　青山正人
宇根龍戒　小島小枝子　榊原龍山　岩崎丹修
堤白遊　小谷敏之　西岡貴美子　松井東游
花房浩佳　中山英石　中嶋秀峰　山本寿法
澁谷蒼江　玉村絹代　樽井渓峰　天野心淵
出来芳草　小林空歩　青木深翠　浅野祥雲
大田桂翠　梶原千佳　荒瀬昌園　水見隆夫
稲葉節子　山本亮子　小嶋昌秋　福谷華紅
竹内照雄　巽　聖石　市川桂水　佐南谷節子
舟山和雄　北畑豊秀　深川玉翠　七里悦香
粕川真人　和田恵子　伊東彩苑　宮澤神竹
足立瑠泉　三好和生　飯田華扇　荒井典恵
中村紀久　保田昌石　奥田鼎石　渥美抱葉
田中瑞峰　仲森蓬園　馬景泉　福本青桐
古野燕安　南白虹　曽我雅彦　北室南苑
伊藤淨盦　筧芳桂　宮崎外茂一　水野和香
伊谷昌子　長谷川帰海　近藤酔念　松阪聖岳
橋本竹苑　平木節子　原硝揚　春日高雄
和田美千代　中山翔石　平崎静翠　入嵩西覚
山西竹聲　田中良子　磯村育治　成田英道
中本崇　若山菟川　清水秀子　小谷征
渡會俊正　阪口香雪　伊井啓　堂守唯文
今井朴仙　藤本忠義　吉田竹庵　仲豊治
鈴木清美　木本研麈　肥田俊雄　福里弘子
三木啓嗣　安達南枝　黒田悦子　池田竹華
奥田晨生　内田康道　中島孝一　松永平峰
松井種子　酒居石荘　荻野蒼雲　松本翠泉
平井濤峰　土田申如　丸山沙舟　谷山豊子
安土嗣生　北本秀憲　小西青窓　西川友皐
後藤勲　米田黄苑　亀原華園　服部清漣
今西九邨　渡邉尚石　中村須賀子　原田恵苑
大庭景雲　土井純司　大村雪陵　山内真波
森井昌雲　新尚園　大村高陵　吉三友
津堅康風　小山渥子　森静二　馬澤幸子
金子旭山　湯浅翠嶺　杉本素月　津村久代
土肥俊浄　甲斐敬雨　高松亮子　鈴木眞壽男
飯田邦生　清水抱石　青黄游魚　中野桂鵬
桑島龍三　筒井耕石　桑木利一　中川輝陽
永田乾石　新桂扇　近藤芙美子　藤村玉堂
駒形蒼岳　林章昌　中島春緑　水江楊石
横関良清　森田時雄　藤川冨美恵　伊藤博則
太田華香　大島敦己　神吉二平　剱田白峰

大路渓岳　大橋実郎　松本亜由美
安井芳泉　相良はる子　会田慶子
平井翠菖　竹内霍山　榎谷俊一
寺西章江　森口淡石　市野香嶺
加藤輝雄　田中緑翠　千蔵天空
小澤博石　八坂武千代　国島康成
田中紀子　富山希祐　糸屋忠夫
榊原晴夫　山崎一雄　小上玉菡
角田敦香　山本陽子　稲本吉次
高橋雅子　上松荘夢　北岡美恵
福谷奎玉　大山模華　大山模華
広瀬大濤　坂本舜華　坂本舜華
田中皋仙　嶋田杏園　木村容庸
竹浪幡龍　中由芝峯　山下芳水
松川白遊　荒川春翠　内藤華泉
宮下英世　伏原準朗　田中秀怜
田山守　鈴木紀山　西口青啖
松嶋翠邨　田原呉山　大泉香華
宮澤神竹　川崎白水　立石見聲
飯田華扇　岸村爽風　川端秀夫
荒井典恵　古波津汀風　松原壮六郎
梶田稲州　浅野江涯　前田竹翠
渥美抱葉　下倉遥水　横田雅丘
横井青蓮　宇都宮蘭雪　毛鶴林
河瀬魚仙　冨澤英一　浅野珊枝子
北室南苑　永野草翠　永井恵子
水野和香　花井青檣　池田蘆翠
佐藤深泉　黄平齋　和田正信
松阪聖岳　匿名　右京克堂
春日高雄　永井龍法　松田泰軒
堀田敬子　益邑隆　伊地美保子
松瀬須磨子　渡邉登　鈴木祐輔
馬場穆風　河村千紅　宮澤鮮
大島光洋　杉山美華　松井翠香
小谷征　吉田宗里　木南美智子
長谷雪梅　平中葭舟　栗山昌幸
王丸郁窓　藤原岳風　中村爛
奥島艸丘　前田舫厓　菅白峰
福里弘子　宇於崎碧峰　正和杏葉
西山由紀子　田中登志子　脇田修治
池田竹華　竹村美智子　小野田真水
濱田聰雨　高尾静苑　工藤芳悦
若杉硯水　杉江周作　笹井省吾
稲田一穂　白尾芳雲　寄田龍神
梅田五月　竹田石涛　寺田和子
高橋北照　浅良朱華　加藤翠園
塩見眞一　新田信子　谷川松雲
石川思玄　名倉克彦　武藤白碩
中西一系　石原豊玉　金森喜渉
矢田高秋　稲葉桂峰　尾崎蒼石
鷹取麗水　草田翠苑　森崎敏宏
高橋元一　内匠俊夫　井関碧水
小朴圃　小田一子　佐々木五六
吉田緑　長谷山墨石　吉原愛璃
坂東香璋　早川聰芬　大柳東里
本江恵翠　大石晃司　丸田拓川
中村葉舟　茶本仙華　岡山翠巒
加藤正順　久米義山　花村秀嶽
渡邉和琴　松岡葵翠　滝本葉碧
森本翠汀　白澤虹石　市川両僊
荒崎浄仙　服部九姚　関野羊越
兼松橘廬　伊藤桃山　阿部祥廬
西浦壽碩　柴久利江　田中壽江

鈴井満　大西芳苑
川崎春彩　原且樹
清水蒼龍　高野弘深
瀧上紀翠　八谷良二
北野河聲　安田正
野坂久美子　村井クニ
山上嶽照　高木貞夫
石亀明峯　長谷川拓石
越尾花嶂　田辺碧水
藤本蘇西　中澤鶴扇
岡端如綸　川波武司
佐川大羊　青田茜華
古田栄枝　小森香苑
内田紅楓　内田真弓
大矢長雲　渡邉静苑
加納孝志　豊田忠男
澤田善石　杉木和子
川端秀夫　岩城暢春
松原壮六郎　鈴木誠三
前田竹翠　片畑仁美
横田雅丘　永野久美子
毛鶴林　永井恵子
浅野珊枝子　池田蘆翠
八木正明　松岡克芳
遠藤米子人　井谷五雲
藤井ミチ子　寺田濤雲
浅野江涯　川添明翠
横田稲州　多田龍淵
下倉遥水　茂呂久美子
宇都宮蘭雪　藤井浩
冨澤英一　中島敬次
永野草翠　御手洗眉山
花井青檣　小浦紫芳
佐藤深泉　山崎富久美
黄平齋　静一華
匿名　中林千影
右京克堂　小森香苑
松田泰軒　内田紅楓
伊地美保子　古溝幽畦
鈴木祐輔　竹内充子
益邑隆　小林江石
河村千紅　柏村丹心
吉田宗里　宮丸清子
平中葭舟　田中九成
宇於崎碧峰　佐瀬理絵
藤原岳風　山藤雅良
前田舫厓　高橋博
田中登志子　土屋功勝
竹村美智子　中島敬次
正和杏葉　藤井浩
脇田修治　茂呂久美子
小野田真水　山岸英雄
菅白峰　松田静石
中村爛　黒田玉洲
藤村香代子　松田仰風
戸出紅桃　石原翠雲
戸出九廬　二穴碧舟
木本千華　堀口秀雄
北野京子　村松瓊玉
杉山哲朗　井上静香
吾郷純子　清水清虚
鷹取千豊　畑間青露
石原白蓉　隅田外男
松本弘碩　池内多恵子
甲斐田晴虹　吾郷純子
藤井徳三　鷹取千豊
松宮智　石原白蓉
渡部芳月　榊原悠園
長谷田曜子　今村美苑
坂本碧雲　串田一逕
安田和代　玻名城泰久
稲田敏子　富山蘭翠
平冨耀
市川両僊
関野羊越
阿部祥廬

庭田露舟
青木雄山
秋山名華
大槻直佑
川久保明
小林尚石
佐藤幸
田村稲廬
丸山蘇碩
山口敦子
天海信子
五十嵐忠
五十嵐忠
大山敦子
金子恵子
小平隆志
小林鶴雲
小林邦夫
佐瀬理絵
山藤雅良
高橋博
土屋功勝
中島敬次
藤井浩
茂呂久美子
山岸英雄
松田静石
黒田玉洲
松田仰風
石原翠雲
二穴碧舟
堀口秀雄
村松瓊玉
井上静香
畑間青露
北野京子
杉山哲朗
村田祥鳳
榊原悠園
今村美苑
串田一逕
玻名城泰久
富山蘭翠

各印社活動トピックス

第四回 稲香印社展

四月五日～十日、名古屋市民ギャラリー栄にて開催。震災祈り印に始まり、仏像に心経鋳造の他、模刻、分刻、陶印、竹印、陶板印、障子作品など、三〇〇点を発表する。

一週間の来場者九八二名。皆さんから一様に「楽しい」「すばらしい」「いいものを見せてもらった」「篆刻のイメージが変わった」など逆に「ありがとう」の言葉をいただき感動しました。

今回は篆刻と陶板のテーマにて、瀬戸・赤津焼、霞仙さんより押印皿・印盒・筆立など提供していただき、立体感ある重厚な展示になりました。（梶田稲州）

第二六回 隨風會篆刻展

―入場者三千三百を越えた―

平成二十三年四月五日～十日まで京都市美術館で開催された。北館一階の一〇一～一〇五までの五室をフル活用しての展示である。

一〇一号室・当会幹部による全紙作品、加彩女子俑他五点。一〇二号室・会員の篆刻作品。一〇三号室・企画として山下先生収蔵の「唐代の文物」が所狭しと並んだ。官職印、加彩俑、万年壷、仏足硯、青銅海獣葡萄紋鏡、青銅碗等々。壁面を使用して、欧陽通、道因法師碑等の拓本展示。一〇四号室・準会員の作品と対印聯も継続。一〇五号室・会員全員による論語「爲政篇」の分刻を折帖で、又この原鈐・原拓印譜も展示。会報月例印集等も折帖で展示した。恒例となったワークショップ「篆刻体験」のコーナーでは一字印に加え、今回は側款の採拓も行ったが協会会員の受講者が多かった。

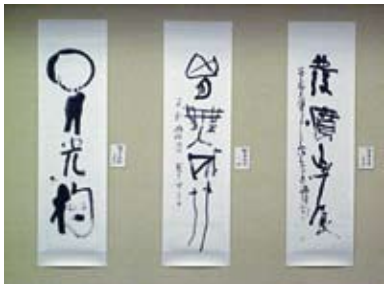
初日より市美に許可を得て、「東日本大震災」の義援金箱を会場内に設置した。震災後すぐの開催であり、このような時期に展覧会が開催できたことへの感謝の気持ちを被災地に届けたいとの思いで当会より五万円を加え、合計八万八七円を読売新聞京都総局に届けることが出来た。

三千三百余名というそれはたくさんの方々にご覧頂けたことに深く感謝し、二七回展に向かってまた新たな挑戦が始まる。（下井嶂葉）

第三〇回 六轡会篆刻作品展

八月二十四日（水）～二十八日（日）の五日間、井谷五雲副理事長、真鍋井蛙副理事長、小朴圃代表理事による六轡会展が今年も京都文化博物館で開催された。

今年は三〇回展ということで、例年とは異なる試みがなされた。合宿をして制作したという作品の数々がそれで、三人合作の書の作品をはじめ、布字と刻者の異なる合作。三文字の印文を一印に一文字ずつ布字し刻した合作等々、観る者を、どんどん作品世界へ引き込んでいく魅力はあふれるものがあった。それは「三人で作り出す作品」に対する愛情に満ちているものであり、観る者の温かな気持ちを誘い出すものであった。その製作風景のスナップ写真も展示され、実に楽しいものであった。



各人の作品は、例年の倍のスペースを使用していることもあり、連作を中心の大作であった。その一作一作をどれだけ丹念に観ても見飽きるどころか新たな発見があるのは、作品の根底にあるものが、観る者の知識・感覚を遙かに上回るからだろう。それは三十年という長い歳月、互いを意識しながら、常に新しい視点で独自の世界を表現し、自己に厳しく、研鑽を積んできたからであろう。

三十年後を予測して、始めたわけではないだろうが、現在、これだけの作品を三十年毎年、発表することのできる作家がどれだけ居ることだろうかと思わせる充実した展覧会であった。（常任委員・幸森倚虹）

越思篆会三〇周年記念展

六月二十四日～二十七日、富山県民会館ギャラリーにおいて「越思篆会三〇周年記念展・富山市民大学篆刻同好会二五周年記念展」を開催した。

作品内容は中国文人的な発想に基づいて篆刻、水墨画、側款、拓本、書を添えた作品、軸、額等一八〇点を展示した。皆ユニークで独創的発想、力作も多く会場を賑わせた。共同作品は百人の会員が一首ずつ「越中万葉百歌」を制作、軸装にした。これは万葉集で有名な大伴家持が千二百五十年前越中国守として地元高岡に赴任、政務の傍ら詠んだ二百二十四首の中から百首を選択したもの。その他「立山七十二峰」「越中河川百撰」「越中銘酒百撰」「百寿」「百福」「七福人」「地蔵菩薩十徳」等を展示した。会場中央には記念誌とした「福寿熟語印」を百二十人で刻し、側款・拓本・印影・印材ともに机上陳列、壮観であった。

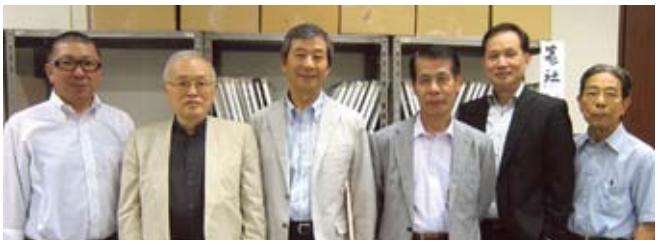
二十六日午後一時からキャッスルホテルで祝賀会を開催し、山下方亨理事長はじめ日本篆刻家協会関係者、来賓、会員など計百六〇人が参加し盛況裡に終了した。

（越思篆会　大村高陵）

展覧会成績

第二八回読売書法展

第二八回読売書法展審査にかかる当協会からの審査員、審査係



篆社（日本篆刻家協会）から公募二〇八点出品、一二五点が入選した。この入選と会友出品四二点の中から特選五点、秀逸二二点が選出された。幹事からの俊英賞、評議員からの奨励賞も左記各氏が選出された。

なお、今回審査には尾崎蒼石、中島春緑、真鍋井蛙が担当した。

（尾崎蒼石）

読売俊英賞（幹事）

中村葉舟

奨励賞（評議員）

出田塘葭　大村雪陵

特選（会友・公募）

遠藤米子人　田中瑞峰　吉野燕安
梅原玉翠　手塚粹杳
秀逸（会友・公募）
新井散葉　尾原衣香　西口青咲
松本弘碩　倉野看雨　村田祥鳳
長谷雪梅　岡上汀華　水巻游光
寺田和仁　清水蒼龍　小森香苑
鷹栖白苑　吉田雅風　関野羊越
大槻直佑　浅良朱華　松本清苑
上田静雲　内田紅楓

全関西展

全国書美術振興会賞

松本雅至

全関西展二席

山本恵子

第六五回 日本書芸院二月審査会

大賞（二科審査員）

下井嶂葉　中野桂鵬　中村千影
松本雅至

特選（一科会員）

尾原衣香　岡上汀華　北田成磊
小谷敏之　後藤亥雲　幸森倚虹
佐藤白咏　塩見眞一　妻鳥明子
豊田忠雄　中山翔石　仲豊治
西口叢映　廣田笙鶴　松岡葵翠
松野碧泉　村上蒼慶　薮下瑛琴
葉蓉　吉原愛璃

一科推薦賞（二科会員）

新井散葉　池谷宝樹　稲富佳子
今釘聴風　大城容史子　樫野美久代
片畑仁美　金井榴華　岸村爽風
古在小綽　高橋忠義　寺西章江
中川典子　中島祥光　濱口韶曄
東緑園　水江楊石　森静二
矢倉心華　山下芳水　山本美津子
山本龍石　林雨滴

二科推薦賞（公募）

浅良朱華　井川千鶴　伊藤瑞葉
伊藤博則　井上江洲　上田青煌
上田明子　上田安彦　奥田鼎石
奥宮愛子　織田真理子　音川景香
笠谷慶舟　香取桃水　金子旭山
北岡美恵　桑名洋一　古泉麻紀
河野篁雪　貞森陽子　下倉遥水
角田蘭景　艸純雅　滝上溪水
田守皓太　中塩惠子　中村爛
平田琴風　益邑隆　丸山沙舟
安井游泉　山口道代

第六五回 日本書芸院三月審査会

史邑賞（一科審査員）

古溝幽畦

特別賞（無鑑査会員）

井後雅堂　大庭景雲　亀井芝蘭
小谷征　寺田涛雲　桃睦苑
永野久美子　西口青咲　畑間青露
平田征男

準特別賞（無鑑査会員）

石留之然　内田紅楓　田丸郁窓
國方得仙　倉野看雨　嶋田杏園
藤本蘇西　松本清苑　山本寿法
吉田雅風

北京芸術院篆刻芸術院常務副院長
駱芃芃先生の個展に招かれて

理事長　山下方亭

北京芸術院篆刻芸術院より常務副院長の駱芃芃先生の書法篆刻展の開幕式に招聘され訪中した。当協会前理事長梅舒適先生が篆刻芸術院顧門に就任、創立式典に私が代行したことに始まる。その後、当協会とは第二四回展に共催で寿山石章による論語と老子語展を大阪市立美術館で開催した。又、翌、平成二十一年には北京において中国建国六〇年の交流展を行い、北京―承徳へ訪中したのが一昨年である。その折の縁で台湾印社の周澄社長と交流展に発展、この十月の訪台の交流につながった。

九月二十一日、会場は中国婦人子供博物館である。通訳として黄平齋氏を同行した。開幕式の司会は芸術院の賈磊磊助理が務め、まずは王文章先生の祝辞に始まり、私は日本篆刻家協会を代表してお祝いを述べた。更にシンガポール書法家協会の陳聲桂先生、続いて文連からは書法家協会理事の白煦氏、西泠印社からは副社長の李剛田氏が祝辞を述べた。その後人民軍参謀長とか文連の主席、王文章院長とお歴々と共にテープカットの後、駱芃芃書法篆刻展を拝見した。その作品の数々は全て駱先生の世界を表現しており、会場を埋め尽くした作品群に圧倒された。これ程の大展覧会は我国では見たことがない。当協会会員にお見せしたい駱芃芃ワールドであった。

http://www.peoplechina.com.cn/xinwen/txt/2011-09/26/content_393071.htm

展示もユニークな会場

事務局から
―印社代表の異動―

日本篆刻家協会所属印社の代表者の異動は次のとおり

壹篆会　邊見仿厓→大橋安泰
常心篆会　大原邦舟→岡田桂舟
長庚篆会　久松蒼雲→富山希祐

―邊見仿厓先生作品集「仿厓印痕」―

当協会顧問の邊見仿厓先生がご逝去され半年が過ぎた。令夫人の意向により、邊見家に当協会の奥田晨生、黒田玉洲、南岳杲雲、長谷川帰海、古溝幽畦が編集に協力し、生前の先生の作品をまとめた遺作集がこのたび刊行された。先生の足跡が理解できるとともに、篆刻学習者にとり大変参考になる作品集となっている。

希望者には一冊三五〇〇円で頒布。詳細は編集委員会南岳杲雲担当まで。

「仿厓印痕」の表紙

青鐙忘詠　小朴圃

「選文」

印を刻すに当たってまずせねばならぬことは選文である。なんという文字を刻すのかが決まらなければ何も始まらない道理である。が、この選文、課題として決められていれば、作品の評価はそれ以降の仕事、即ち印稿にどれだけの工夫を盛ってどう刻すか、ということで決まるので純粋に技倆の問題となってくる。

が、自分で選文してからの作品で、その出来映えを競うとなると、その最初の段階でスタートラインの位置が違うことにも繋がり、ことは重大である。

いくら自分にとって気に入った文章だとしても、それを作品化した時に平面芸術としての効果がそれほどには上がらないものもあるからである。できればその効果が十分望める選文をしたいと願うのは、至極当然のことともいえる。それが公募展ともなれば尚更のこと。

印譜や字書を見て、これは面白い、この文字のある文を刻してみたいものだ、との思いが起こったとしよう。そこで漢和辞典に当たってみる。できるだけ大きな漢和辞典の方がよい。と、その文字の項目の最後には必ずと言ってよいほど、その文字を使った漢文の用例が挙げてあるので、そこから選び出せば簡単にお気に入りの文字が入った成語が入手できるという次第。

いやー、こんないい方法があったのかと、大いに感心したのはもう三十年位も前の、篆社での合宿での所洞谷先生の講演の中であった。

月例作品募集（2012年）

	課　題	出　典	意　味
1月	長生和気	《易林》	長生きで、いつも和やかな気色
2月	爰得我娯	北宋・柳永	ここに自分の楽しみを得た
3月	強其骨	《老子》	国民を健康する
4月	不飛不鳴	《史記》	じっと身をひそめて時期を待つこと
5月	白雲深處	唐・杜牧	白い雲の深いところ、世間を逃れる隠遁者の世界をいう
6月	今是昨非	晋・陶潜	過去の過ちにはじめて気づくこと
7月	心画	《法言》	文字は書いた人に心が現れる
8月	千秋願	宋・欧陽修	千秋は千年と同じ　長年の願い
9月	盈盈秋水	車晋・陶淵明	盈盈は女性の容姿のしとやかで麗しいさま。 秋水は秋の澄み切った水。女性の美しい容姿は秋の澄み切った水のようであるとのたとえ
10月	木鶏	《荘子》	強敵に対してびくともしない 転じて学問が深く純粋な人をいう
11月	皆大歓喜	《四分律》	仏教語　だれもが大いによろこぶこと
12月	癸巳	2013年の干支	

応募要項

① **一般は一般を、一般以外は会員CDを必ずご記入ください。未記入の場合は審査対象外となります。**
② 印の大きさは一寸以内、用紙は協会指定印箋（篆社印箋も可）
③ 応募は各月1人1点、締め切りは各月末日（消印有効）

送付先　〒563-0032 大阪府池田市石橋2丁目2-10 牧野ビル203　日本篆刻家協会「○月課題」係

お問い合わせ（協会事務所）**TEL072-760-3852**

月・火・木・金は10：00～15：00（昼休み有り）水曜日のみ13：00～17：00（時間内でも所用の為不在有り）土・日・祝日休み
協会への問合せ・各種申込には会員CDをご記入ください。
◎年内（1月～12月）の資格変更はありません。雅号・所属印社の変更は6月1日～11月末日（住所変更は随時）
◎変更・退会はご本人が協会事務所まで書面（FAX可）にてご連絡をお願いします。（印社代表よりの協会への連絡はない場合が多い）

展覧会の案内と報告

展覧会案内

▼畦石舎（小朴圃）
篆刻・書・画
第二六回畦石舎作品展
会期　一〇月一日～三日
会場　日図デザイン博物館
特別陳列 崇山三闕拓眞

▼齊平篆会（真鍋井蛙）
第一四回齊平展
併催　本会顧問寺田正孝先生遺作展
会期　一〇月七日～九日
会場　大阪くらしの今昔館
テーマ展示「春暁」

▼不華篆会（酒居石荘）
デザインとして見る篆刻の展開
不華篆会習作展Ⅹ Ⅸ
-「華」をサブテーマに生活の中の書・篆刻-
会期　一〇月八日～一〇日
会場　伊丹市立工芸センター
同一二日～二三日に丹波の森公苑で巡回展

▼遠邇篆会（伊藤雅夫）
第二〇回遠邇篆会篆刻展
会期　一一月一日～六日
会場　浜松市　クリエート浜松
机上展示 富嶽三六景分刻

▼蒼文篆会（尾崎蒼石）
第一四回蒼文篆会展
会期　一一月二一日～二三日
会場　大阪市　大阪美術倶楽部新館
中国招待 澳門書法篆刻協会作品

▼篆霤社（古溝幽畦）
第五回篆霤社游藝展
会期　一二月二一日～二五日
会場　兵庫県立美術館原田の森ギャラリー
特別陳列 歴代碑法帖臨書展
（殷～清　古典六五選）

展覧会報告

▼淡味篆会（南岳杲霊）
淡味篆会展二〇一一
会期　八月二六日～二八日
会場　姫路市民ギャラリー

【会員個展】
▼**南岳杲霊展二〇一一**
会期　八月二六日～二八日
会場　姫路市　ギャラリーとーく

協会の行事

平成二三年度
第一回理事会・新年会
一月二六日(日)　大阪錦城閣

第二回理事会・平成二三年度総会
講演会
『梅舒適先生をめぐって』(書道文化研究家西嶋慎一先生)
懇親会
二月二三日(日)　ホテル大阪ベイタワー

日本篆刻家協会北海道展
三月一日(火)～六日(日)
札幌市　大丸藤井セントラル七階スカイホール

第二七回展審査準備
四月一日(金)　大阪市中央会館

第二七回展審査会
四月二日(土)　大阪市中央会館

第二七回日本篆刻展
〈特別展観
―唐代の書と文物（本会員所蔵）〉
五月一七日(火)～二二日(日)　大阪市立美術館

第二七回日本篆刻展授賞式
五月二二日(日)　ホテル大阪ベイタワー

第三回日本篆刻家協会役員展
開幕式・講演会
六月二五日(土)　古河市篆刻美術館

第三回日本篆刻家協会役員展
六月二五日(土)～八月二五日(木)　古河市篆刻美術館

第四回中央研究会
『初世・二世中村蘭台とその周辺～菅野梁川の自用印を中心として～』(真鍋井蛙副理事長)
特別講演
『近代中国絵画について』(関西大学名誉教授山岡泰造先生)
八月二〇日(土)～八月二二日(月)
シーサイドホテル舞子ビラ神戸

予定

海外交流
台湾印社交流訪台
十月二二日(金)～二五日(火)

常務理事会
二月二六日(土)

平成二四年度
第一回理事会
新年会
一月九日(月・祝)　大阪錦城閣

第二回理事会
平成二四年度総会
二月二二日(日)　ホテル大阪ベイタワー

企画委員会　随時

編集後記

☆「東日本大震災」について整理した感想・意見は今も語ることはできない。

巨大津波の恐るべき破壊力は、人々の日常を厖大な数の人命ともどもわずかな時間のうちに呑み込み奪い去り、堅牢を誇ったはずの原発さえ無残な姿の巨大危険物に変えてしまった。

しかし私たちは、様々な感慨や祈りを抱きつつも自身の日常を持続するしかない。それしかできない口惜しさと、それができることの尊さをかみしめつつ。

☆前号で予告されたとおり、月例課題作品の取り扱いが大きく変わりました。掲載印影半減、応募者氏名も上位十五人のみ。多くの意見が交錯したことを踏まえての理事長判断です。ご理解いただければ幸甚です。（H）

編集：会報部
酒居石荘　榊原晴夫　中村葉舟
木村容庸　内田真弓

お気づきのこと、ご意見など事務所までお寄せください。

FAX: 072-760-3853
MAIL: info@n-tenkoku.jp